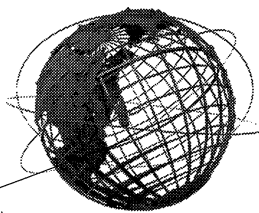


山形辰史

Yamagata Tatsufumi

1963年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業、ロチェスター大学大学院修了 (Ph.D.)。現在、日本貿易振興機構アジア経済研究所開発研究センター開発戦略研究グループ長。著書：『開発経済学 貧困削減へのアプローチ』(共著、日本評論社)、『やさしい開発経済学』(アジア経済研究所) ほか。

物乞いするのは
貧しいからか

大学3年の夏休みに物乞いをした。岩手の地方都市に帰省しており、そこから電車で1時間ほどの盛岡に用事があった。用事を済ませたら古本屋が目前にあり、そこで鳥居泰彦著『経済発展論』を見つけた。以前から欲しかった本なので、それを買うと帰りの電車賃しか残らないことを知りつつ、買った。盛岡駅に着いたら、実は所持金が電車賃に数十円足りないことがわかり愕然とした。

その足で盛岡在住の親戚を訪ねた。親戚の家は留守で、約30分待ったが誰も帰ってこなかった。

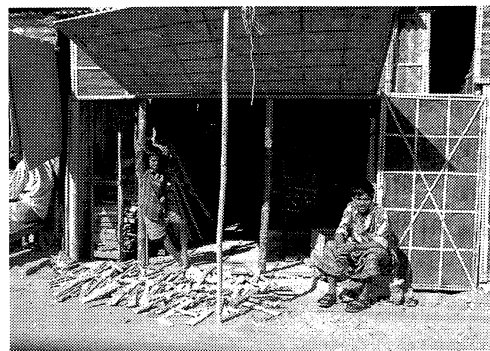
意を決して再び盛岡駅に向かった。他人にお金を乞うしかない、と思ったのである。交番を訪ねるとい知恵は働かなかった。当時は携帯電話もなかった。

券売機の前で、中年の男性に当たりをつけて話しかけた。女性には怖がられるかもしれないと思ったのである。記憶では、最初の人には断られた。二人目の人が100円をくれて、後ろを振り返ることなく足早に立ち去った。自分がその人でもそうするだろう、と思った。

物乞いをするときは、恥ずかしさや躊躇、あきらめ等がない交ぜになったような気持ちだった。帰宅後、家族に悪し様に言われた。

●物乞いの典型

発展途上国の都市では物乞いを多く見かける。彼らは人が集まる場所、例えば寺院や市場、信号のある交差点に向いて、通行人に物乞いをする。自分一人で行動できなければ誰かがスポットに連れて行ってくれるのであろう。バングラデシュで、腕も足も切断か退化かしてしまった人が銀行の前で毎日物乞いをするのを見かけた。と言っても、何か話しかけてくるわけではない。彼のたたまいと前に置かれたプレートで、望むことがわかる



手持ちぶさたにしている子どもたちは、外国人を見ると、おもしろ半分にはチップをねだる。2000年、バングラデシュの首都ダカにて。

のである。いくらかでもお金を置くと目で挨拶してくれる。

多くの場合物乞いは、自分の立場が相手の立場より低いことを、物乞いの理由として用いる。高齢あるいは若齢、身体障害、および乳飲み子を抱えていること等が典型的な物乞い正当化の理由である。このように、自分が弱い立場であることを示すことによって金品を乞う人々には、多少なりとも引け目があるように私には思われた。というのは、自分の弱さ、惨めさをさらけ出すことでしか、収入が得られないからである。身体障害者は自分の障害をことさらに強調しなければお金をもらえない。ある時、バングラデシュでこんなことがあった。10代後半ぐらいの健全者に見える男性が物乞いをしていたのだが、初めは彼のどこに障害があるのかわからなかった。すると彼はやおら自分の性器を頭わにし、それが切断されていることを示したのである。私は動転して、これは大変だと思い、すぐにお金を与えた。しかしよくよく考えてみれば、彼は普通に働くことはできて、物乞いする必要はなかったかもしれない。

●「だめもと」の物乞い

一方、物乞いすることへの引け目が全く感じられない場合もある。例えば、アメリカでは、自分の主張を大書して判断は通行人に任せる、というタイプの物乞いがある。また、物乞いをしているように全く見えない人が、スーパーの駐車場等ですれ違いざまに「おい、金くれよ」と声をかけることもある。

発展途上国においても「だめでもともと」とい

う気持ちで物乞いされる場合がある。バングラデシュでは、手持ち無沙汰に人通りを眺めている男の子達が「ちょっとその人、俺たちの友達だろう！ チップくれよ」と外国人に声をかけることがよくある。おそらくは敗戦後の日本で子ども達が進駐軍に「ギブ・ミー・チョコレート」と言ったのと同じ感覚なのであろう。

またある時、三輪タクシーに一人で乗っていたら、運転手が、乗客である私の了解を得ることなく、同じ方向に行く別の乗客に同乗を許したことがあった。同乗自体は仕方がないかと思っただ、乗ってきた身なりのしっかりした若い男が、面識がないのにも拘わらず「おい友達よ、チップくない？」と言いついたのには驚いた。私が「あなた貧しいの？ そんなわけないでしょう！」と肩を叩いたら、彼はニヤツとしてその後は気まずそうにして隣の席で黙っていた。

●しなくてすむならしない

対照的に、東京の公園や駅で生活をしている人々が物乞いをするのを見かけない。彼らは物乞いをせずとも、賞味期限の切れたお弁当などで食いつないでいけるのだろうか。伊丹十三監督の『タンポポ』という映画には、ホテルのゴミとして出される飲み残しのワインを集めて、聞き酒ができるほどワインに詳しくなる路上生活者が登場する。それが本当かどうかは知らないが、彼らが物乞いをしなくても生活できることは事実であろう。

現在の私の物乞いに関する仮説は以下のようなものである。人は誰しも不面目を嫌う。「周りの誰もがやっている (例：バングラデシュの子どもたち)」または「今後二度とこの相手には会わない (例：上記の三輪タクシー同乗者)」というような場合以外は、物乞いすることは不面目に相当する。したがって、必要に迫られなければ人は物乞いをしない。日本の路上生活者のように、物乞いをしなくてすむのであれば、何人であれ誰も好んで物乞いはしない。

この仮説が正しいと自信を持って主張するに足るほどの経験が、私にはまだない。